

と異なる結果を得た、*T. shinanense*, *T. formosanum*, *T. hondoense* については、従来の報告者間に、同定上の混同のあった可能性も考えられる。特に、台湾原産の 2 倍体とされた *T. formosanum* と、日本産の *T. formosanum* との異同につき、Kitamura (1957) の見解を疑問とする異論のある (森田, 私信) ことから、各系統の比較研究が必要である。詳細な核型、その他の比較については、後日とりまとめて報告する。

今回、染色体数観察に用いた個体は、現在も当研究室圃場にて栽培を継続中である。減数分裂、種子生産量、種子稔性、開花数、葉型の年周変化、交雑後代の試作等の観察はもちろん、更に核型を詳細に比較した後に、乾燥標本として、科学博物館に寄贈する予定である。観察個体の重複標本は、それまで当研究室に保存しておくものとする。

○高等植物分布資料 (89) Materials for the distribution of vascular plants in Japan (89)

○フジアザミ *Cirsium purpuratum* (Max.) Matsum. フジアザミの分布は那須地方が北限として知られ、「那須の植物」(生物学御研究所編 1962) にも此の地が北限であると記されている。

昭和29年 (1954) 10月22日に私は宮城県玉造郡鳴子町の鳴子峡で、此の種類の開花品を採集した。峡谷の中ほどの屏風岩付近に多数生育していた。此の峡谷は荒雄川の支流で山形県境より発し、約5キロが深い箱形で東流し、兩岸は凝灰岩より成り立つ岩壁で、主としてその日当りのよい北岸の斜面にのみ自生していた。

東邦大学薬学部で幾瀬マサ氏が当時花粉の研究中であったので、その材料として此の花を他のものと共に、当時その研究指導をしておられた久内清孝先生宛に、旅先の仙台より発送した。その後久内先生は所有のアザミ類の標本を東京大学へ持参され、これを北村四郎先生が見られる機会があった。その時この問題の標本もその中にあって北村先生はこれをフジアザミであると同定され、東北には最初の発見であろうとされたが、その産地が 'Sendai' となっていたのでこれに疑問をもたれた。そこで久内先生は再度の調査と確認を私に依頼してこられたが、当時私はこれが分布の北限を示す貴重なものであることを知らずそのままになっていた。

昭和50年10月に鳴子峡を尋ねてフジアザミの存在を確認したが、なぜか開花株は見当らなかった。また昭和50年9月に友人の泉広昌君が荒雄川上流の鬼首の間歇温泉でも発見している。那須地方より直線ではぼ200キロ北上したことになる。

最近久内先生は上記の標本をさがし出され、東京大学総合研究資料館へ寄贈された。それには北村先生の手記によるフジアザミの学名が付してある。

(山形県南都留郡 富樫 誠)